

専念寺通信

専念寺通信

六月号 (NO. 106)

<http://sennenji.s296.xrea.com/>



雨の多かった5月が終わり、もう6月、専念寺境内のあじさいもきれいに咲きました。気温差の大きい毎日ですが、みなさまおかわりなくお過ごしですか。

施餓鬼会法要

5月31日、日曜日、193名の檀家さまをお迎えて、ことしも大施餓鬼会法要がおこなわれました。11時に、大玄闕の喚鐘が打ち鳴らされ、浄土宗東京教区寺院の住職8名と、当山、専念寺住職による読経が始まりました。

ことしも本堂、テント席、書院まで、いっぱいのお檀家さまで、途中までは立って参加している方もいらっしゃいました。法要はとどこおりなく進み、住職が塔婆施主名、ご戒名を読みあげるころには、さいわい、小雨もあがり、11時45分、法要は無事、終了いたしました。当日の写真を少し撮影いたしましたので、掲載させていただきます。餓鬼棚には、季節の野菜や洗った米、果物、菓子などが供えられています。また、ち



いさなお膳も供えられ、中央には白米のご飯が、そしてみなさまが当日お持ちくださったお供物も、棚の両側の経机にすべてお供えされています。ご本尊のある壇とは別にこの日だけ設置される餓鬼棚です。

新しくした墓地の桶も掲載させていただきます。浄土宗の紋を中央に入れました。

施すということ

法要のあと、住職は「施す」ということについてお話しさせていただきました。現在のように、世界の先進国が経済的にも厳しい状況になってきますと、私たちの国もその影響を受けざるを得ません。このような毎日でも、「施す」という気持ちを忘れずに生きていくことが重要になる

のだ、という内容でした。「施す」のは、お金や物でなくとも良いのです。ちょっとした気持ちや、言葉、なごやかな雰囲気だけでもいいのです。笑顔、でもいいのです。「喜捨」というと、なんとなく金銭を思いうかべてしまいがちですが、住職の申し上げたかったことは無論、そうではありません。いま、自分の持っているものの中で、少しでも余裕のあるもの、それを縁のある人に、出会った人に、わけてあげましょう、手渡しましょう、ということです。ある人はお金に余裕があるかもしれませんが、ある人は幸せに恵まれ、気持ちに余裕があるかもしれず、何もないけれど時間なら余裕がある、という人もいるでしょう。あるいは、身体だけは丈夫だぞ、という人も。それぞれの人が、自分の持っている何かをひとつ、他の人に手渡す、また別の人は別の手に手渡す、これがつながっていけば、時間がたっても途絶えずに続いてゆけば、私たちは、つらい状況を乗り越えることができるでしょう。ずっと続けましょう。いつも覚えていて試してみましよう。誰でも、何かひとつ、生まれたときに授かったちからがあるので、努力して手に入れたものでも、惜しまず少しだけでよいから分けてあげましよう。

皆さまの日々が穏やかでありますように。

平成21年6月1日 大黒

